

救える命があればどこへでも

国際医療ボランティア AMDAのとりくみ

第4回



預言者の宗教

菅波 茂【AMDA 代表】

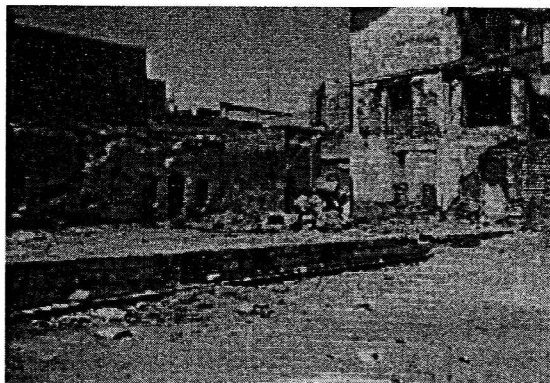
災害という不条理の世界の中で

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震・津波によるイスラム教の被災者は、神による罰と考える人が多かった。2003年12月26日に発生したイラン南東部地震の時の被災者も同じだった。神による罰なのだから、AMDAによる巡回診療を受診するのも積極的でなかった。一方、非啓典の民であるヒンズー教徒は、何故に親のような神が自分たちを見放したのかと嘆いた。一瞬にして親や子ども、親しい友を失った。災害という不条理の世界に遭遇した時に、人は何を考えるのか。如何に自分を納得させるのか。何を求めるのか。国際社会は宗教なしには理解できない。日本は啓典の民（ユダヤ教やキリスト教、イスラム教など）から孤立した時に不幸な歴史を経験している。不幸な歴史とは戦争という不条理の世界である。啓典の民にとって神は残酷である。民が神との契約を守らないとジェノサイド（皆殺し）をする。その前に、神

は最後の機会として預言者を送る。「神はまだ民を見放してはいない。預言者の言葉を尊重して契約を守るように」と。神から預言者に託された言葉が啓典である。したがって、「預言者の宗教」ともいえる。

国際貢献という定義なき造語

思い出して欲しい。日本中に激震が走った1990年を。「顔が見えない日本」という。日本は湾岸戦争で米軍を中心とする多国籍軍に1年分のODAに相当する140億ドルを提供したにもかかわらず、クエートが米国の新聞に感謝をこめて載せた30カ国に日本の名前がなかった。「国際貢献」という定義なき造語をメディアは発信した。1954年のコロンボ計画への加盟から続いている「国際協力」とどこが異なるのか。定義がないので理解しがたい。1991年に外務省はNGOへの公的支援を強化し、郵政省（現日本郵政公社）は国際ボランティア貯金を発足させた。国だけで駄目ならNGOを使おうと。国が管理しない団体に



イラクのアル・ファウ市街地。時折銃声が聞こえ、破壊の爪跡は至るところで見うけられた。2003年3月～5月にかけて AMDA 緊急医療チームは、緊急時に備えて、イラクとの国境地帯において24時間態勢で救急車輛をスタンバイしていた。

税金を投与することは、私学助成金と同じく、憲法違反であるにもかかわらず。考えてみて欲しい。相手は米国とクウェートである。キリスト教とイスラム教の共通要因は預言者の宗教を信仰する啓典の民である。

預言者になれなかった首相

2001年9月11日。米国中枢同時多発テロが発生した。日本は何をすべきだったのか。遅れること二週間にしてテロに対する7項目の行動計画を発表した。米国は一顧だにできなかった。歯牙にもかけなかった。何故か。およそ米国民の50%がプロテスタントで25%がカトリックともいわれている。米国は啓典の民の宗教国家である。米国民にとってはテロの現場は世紀末の修羅場の如し。まさに預言者の登場にふさわしい状況だった。「飛べ!小泉首相」こそ日本がすべきことだった。3日以内に、崩れ落ちた世界貿易センタービル跡に立ち世界に叫ぶべきだった。「反テロ。人道支援」のメッセージを。啓典の民は疑いもなく彼に預言者の姿をダブらせたはずである。「リメンバーパールハーバーからリメンバー小泉」は必定

だった。日本は最大の機会を逸した。彼は世界の政治家になれたはずである。何故なら貴重な前例があるからである。それはエリツイン大統領である。彼がロシアにおける民主主義の象徴として華々しく欧米諸国に迎えられた状況を思い出して欲しい。1991年8月に共産党によるクーデターが勃発した時に、彼は戦車に乗って共産党が立てこもる国会議事堂に向かって吼えた。「自由と民主主義を守る」と。その映像はCNNによって世界中に流された。まさに預言者の如しだった。その映像がすべてを決めた。ただし、エリツイン大統領がそのメッセージにふさわしかったかどうかはその後の歴史が証明しているが。そして某大使館員から聞いた話が耳に残っている。「CNNが一週間前から撮影の位置を検討していた」と。

世界唯一の被爆国として

広島県江田島市に駐屯する自衛隊がイラクに派遣される時に某新聞社から取材を受けた。「自衛隊派遣をどう思いますか」と。「自衛隊派遣は違憲である。反対である」と答えれば無難である。某新聞社もその答えを期待



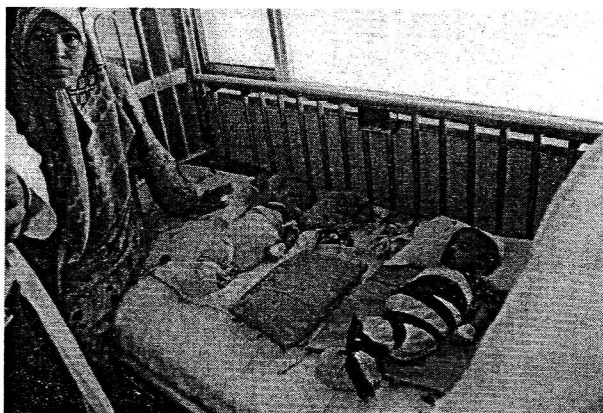
被災した家族。家屋が崩壊し、郊外の空き地でプラスチックシートや布で建てたテントで暮している。衛生環境は劣悪で、日中の気温が40度をこえるなか、コレラなどの感染症の流行が懸念される。AMDAは地元医師に予防・治療薬を配布した。

していた。しかし、それは国内問題としての枠だった。最初に大前提を言った。「国際社会では、友が困っている時に何もしないのは最悪の選択肢である」と。「相手は預言者の宗教である。現地で多くの人たちが戦争・紛争の被害を受けている時にこそメッセージのある行為が必要である。自衛隊派遣反対だけでは理解されない。サマーワ・ヒロシマ子ども病院を建設。広島大学原爆放射線医科学研究所が医療従事者の訓練や治療の支援をする。そして病院の警護に広島にある江田島から自衛隊が派遣される構図が最良である」と説明した。イラクでは、1990年に使用された劣化ウラン弾による白血病や小児癌の子どもたちが、十分な治療が受けられずに苦しんでいる。首都バグダッドにある小児医療センターは治安が悪いためと医薬品の不足により稼動していない。サマーワ・ヒロシマ子ども病院の建設と職員の雇用は、復興事業として意義がある。劣化ウラン弾の後遺症に悩まされている子どもたちと両親たちにとっては最大の福音である。では、日本からのイラクの

人たちに対するメッセージは何か。「世界で唯一の被爆国として劣化ウラン弾に悩むイラクの人たちを見捨てない」である。誰が日本に原爆を落としたのか。米国である。誰が劣化ウラン弾を発射したのか。米国である。日本とイラクは被害者である。友として助け合う。これが影のメッセージである。世界のイスラムの人たちによる日本の理解のキーワードは2つである。ひとつは広島と原爆。もうひとつは日露戦争と東郷元帥である。常に世界のイスラムの人たちからの視線に応えるメッセージのある行為をする必要がある。

預言者の反対のイメージ

預言者の宗教を信仰する啓典の民に誰がメッセージを伝えるのか。預言者は神から選ばれる。主権国家の日本では国民から信託を受けた国会議員である。外務官僚は神官になれても預言者ではない。閣僚が預言者の中の預言者である。「閣僚よ。イラクあるいは周辺国へ飛べ！」そして叫べ。「日本はイラクの人



アマラ総合病院 (2003 年6月)



アマラ総合病院で調査をする AMDA 登録看護師 (2003 年6月)

たちを見捨てない」と。アルジャジーラ、アルアラビアなど現地のメディアに積極的に出演せよ。日本人が拉致された時だけこれらのメディアを活用する。「日本人を殺さないでください。日本人を助けてください」と。最悪のメッセージである。軽蔑されるだけである。何故なら預言者の反対のイメージだから。

普遍性が示すもの

イラクへの自衛隊派遣の国民的議論で致命的だったのは「普遍性」に欠けていたことだった。普遍性とは何時でも何処でも誰でもがそうだと思うことである。それは不条理の世界に放り出されている子どもたちだった。その子どもたちのために何ができるのか。何をしなければならなかったのか。ヒントは1990年の湾岸戦争にある。米国の広告会社が米国の世論を高揚させるために駐米クウェート大使の娘を難民の娘として登場させた。そしてクウェートに侵入したイラク軍が病院の保育器を使用している乳幼児を放り投げた等々の作り話。圧倒的な説得力と

メッセージ性があった。何故か。子どもは大人にとって明日への希望である。どんなに戦っている状況においても希望を失いたくないのが大人である。その希望が破壊されそうになる時にどんな大人でも阻止しようとする気持ちが動く事実を忘れてはいけない。その究極のメッセージこそ「預言者の宗教」に肉薄できる補助線である。その補助線の引けない政策は迷走である。「救える命があればどこへでも」は預言者の宗教を信仰する啓典の民にとっても普遍性のあるメッセージである。そして繰り返したい。不条理の世界に遭遇した人に対する最大のメッセージは「あなたを見捨てない」とであると。

2003年5月以降、クウェート方面より米英軍の保護のもと、医療および物資等の救援が同地域に到着し、AMDAは緊急支援活動を終了しました。続いて6月には医療調整員など二人がバグダット市内を視察し、医療システム復興支援の必要性を痛感しました。しかし、現地の情勢が許さず、現在まで、AMDAでは常時情報の収集を行いながら支援の方法を模索しています。